

意識変化をアンケートで測り、同世代型と世代ミックス型の議論で3つのテーマを深める

開催概要

目的: ①20～30年先の雪対策のあるべき姿について市民議論を行い、雪対策審議会の議論や、市民会議の論点設計のための基礎資料として活用。②新たな仕組みづくりのための、多様な意見を引き出すための「議論のフレーム」の構築。

名称: 雪対策の未来を考える市民ワークショップ

日時: 10/19(日)13:00–17:30

場所: TKP札幌ホワイトビルカンファレンスセンター
ホール2B

対象: 18歳～79歳の札幌市民40名程度

選出方法: 二段階抽出。住民基本台帳から3,000人を無作為抽出し案内状を送付。応募者から、年齢、性別、居住形態、居住地域などの属性バランスを考慮して決定し、7グループを構成。

進行: 司会とテーブルファシリテーターを配置。

論点と問い: 3つの論点と、それに紐づく2～3つの問いを設定。

【論点】

- ①限られた資源で、何を優先するのがよいか
- ②雪をどう受け入れ、どう支えあうのがよいか
- ③大雪の日の暮らし方のルール

備考: 謝礼5千円。開催一週間に事前資料送付。

当日の流れ

受付・情報提供

12:45 受付・T1アンケート

13:00 オリエンテーション(10分)

13:10 情報提供 (20分)

13:30 T2アンケート (5分)

同世代ディスカッション・全体会議

13:35 年代別に議論(57分)

14:32 休憩・質問集約(10分)

14:42 全体会議(Q&A)(15分)

世代ミックスディスカッション

14:57 世代をミックスして議論(73分)

成果の集約と共有

16:10 ギャラリーウォーク&シール投票 (15分)

16:25 グループ発表(30分)

ふりかえり・アンケート

16:55 休憩(10分)

17:05 ふりかえり(テーブル→全体)(20分)

17:25 T3アンケート (5分)

解説

アンケート調査

- ・T1: ベースとなる意識傾向を確認。
- ・T2: 情報提供による意識の変化を測定。
- ・T3: 各論点への最終判断とプログラムの評価。

情報提供

- ・制約条件(人、予算等)、市民アンケート結果、とりうる選択肢とメリット・デメリット。

同世代ディスカッション

- ・雪のある暮らしのプラスとマイナス面を共有。
- ・4つの未来像(シナリオ)と支持理由を話し合い、大切にしたい原則をテーブル毎にまとめる。

世代ミックスディスカッション

- ・各世代の意見を持ち寄り、合意点を探る。
- ・3つの論点について、各テーブルの結論をポスターにする。

ギャラリーウォーク&シール投票

- ・各テーブルのポスターを見た後、全員で3つの論点毎に優先度の高い選択肢を1つ選び投票。

制約条件と市民意見から論点を抽出

条件

A

人の制約

除雪の担い手は高齢化が進み、担い手の不足が見込まれる。繁忙期は集中的に人手が必要だが、従事者を増やすことには課題がある。

B

予算の制約

雪対策費は年々増えており、他の分野とのバランスを取らなければならない。

C

新技術の不確実性

自動運転などの新技術には期待があるが、不確実であり、短期的な効果も限定的。

D

気候の不確実性

局地的、集中的に続く降雪や急な暖気等、気象の変化に関する不確実性の高まり。

市民意見(アンケート結果)

E

除排雪の強化と安全志向

除排雪を強化してほしいという要望のほか、情報提供後、歩道や交差点の見通しへの安全意識の高まりが見られた。

F

地域協力への支援

地域協力への市の支援を求める声もある。

G

技術への期待

新しい技術や設備の導入への高い期待。

H

受け入れ意識

情報提供後、雪に関する不便さを許容する意識への変化が見られた。

論点

① 限られた資源で、何を優先するのがよいか

人や予算には限りがある一方で、生活道路の除排雪の強化や安全意識の高まり、新技術への期待がある。同時に実現するのは困難であるため、優先順位を選ぶ。

A

B

C

+

E

G

② 雪をどう受け入れ、支えあうのがよいか

サービスの維持が難しくなる可能性があるという現実に対して、地域協力への支援や不便さを許容する意識も一定程度ある。どのような条件で不便さを受け入れ、地域の力と行政の支援を組み合わせるかを明らかにする。

A

B

+

F

H

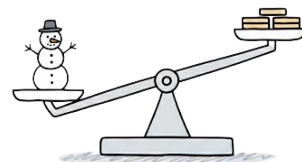
③ 大雪の日の暮らし方のルール

大雪や路面の悪化がいつ起こるかは予測困難。社会全体の大雪の日の行動のルールの必要性について考え、市民による生活の工夫の可能性を探る。

D

+

H



より質の高い対話に向け、過去の課題を踏まえた上で設計に反映

概要

成果と課題

今回の設計への反映

ケース1
未来の成人式
を考える市民
会議

2024/10/27・11/4

対象・構成：市民各41名／2日間。市の縮図型／同世代議論型の2方式を試行。主体・場所・財源の各論点について議論を実施。
結果：市の縮図型では、若年層から「同世代と話したかったという」意見があった。同世代議論型では「仲間意識」により話しやすい雰囲気形成され、議論が活発化。

成果：本音と多様性を引き出すには同世代→ミックスの「ハイブリッド対話」が有効と考えられる。
課題：情報提供のバランスに関する評価が低かった。行政が特定の結論へ誘導していると受け取られるリスクを避けるため、シナリオを提示するなどの工夫を行う必要。

採用する対話の形
・**ハイブリッド対話**：前半は同世代（年代別）で安心して本音を出し、後半は世代ミックスで多様な価値観をすり合わせる。
・**サンドイッチ構造**：暮らしの実感や理想を出発点にする→制約（人・お金・技術・気候）を共有→現実的な方向性を議論→学びを言語化し理想を再確認する。

ケース2
北海道大学・雪
対策の未来を
考えるワーク
ショップ

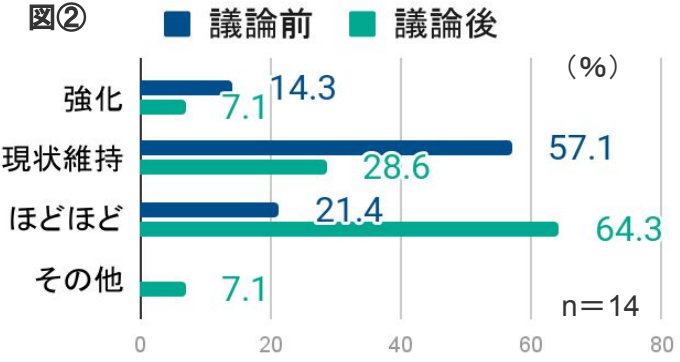
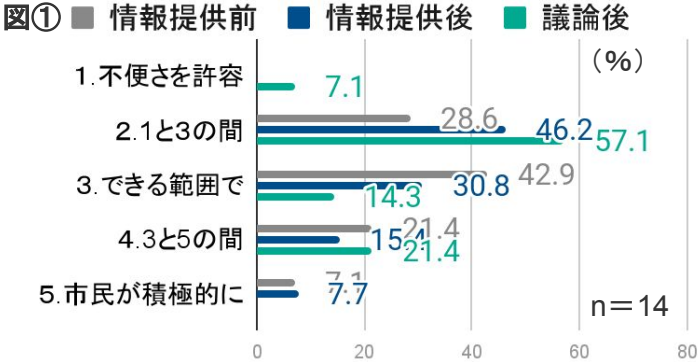
2025/6/18・25

対象・構成：北大生14名／2日間。①雪のプラス面・マイナス面の共有→②雪対策の方向性を選択（強化・現状維持・ほどほど）→③行政・市民・企業の役割を検討。
結果：「心構え」は、不便さをやや許容する態度に変化（図①）。「方向性」は、64.3%が「ほどほど」を支持（図②）。

成果：“自分では気づかなかったことに気づけた””多角的に物事を見ることが重要だと改めて感じた”といった感想が寄せられた。理想→現実→選択の「サンドイッチ構造」が多角的な視野の獲得につながる可能性。
課題：「ほどほど」などの表現は、解釈に差が生じるため、結果の活用に課題。

道具（議論の素材）
個別の選択肢だけではなく、目指すべき未来像（シナリオ）や市が用意できる可能性のあるメニューなど、メリットやデメリットを含めて比較できる形で提示する。

問い（設問設計の工夫）
・優先順位、受け入れるための条件など、結果を活用できるように、可能な限り言語化する。（例：×『ほどほど』の雪対策→「どこまでなら受け入れられるか」を具体化）



トレードオフを明確にした 4つの未来像から、進むべき道を探る



A. 快適性優先

冬の移動の快適性を優先し、冬でもスムーズな移動を実現する。

トレードオフ：費用の増加



B. 地域で支えあう

地域の力で細やかな除雪を行い、行政は活動を支援する。

トレードオフ：地域差、地域負担の増加



C. 技術に投資

将来の担い手不足に備え、自動化などの技術に重点的に投資する。

トレードオフ：短期的効果が小さい



D. 行動を変える

大雪時は「無理に動かない」を社会のスタイルにする。

トレードオフ：経済活動の抑制



個別に論点を議論するだけでは、何かを選べば何かに影響が出るという「トレードオフ」の関係が見えにくい恐れがある。
論点を組み合わせた4つの未来像(シナリオ)を道具として活用し、対話を深める。

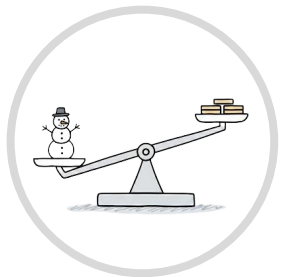
何を優先するか、どう受け入れるか、どう暮らすかを市民とともに考える

テーマ(論点)

対応する問い※アンケート調査に質問を設ける

得られるアウトプット

① 限られた資源で、何を優先するのがよいか



Q①: 4つのシナリオ(A~D)への賛成度(各7段階)

- └ A.快適性優先
- └ B.地域で支えあう
- └ C.技術に投資
- └ D.行動を変える

Q②: まず優先して進めるならどれか(A~Dから1つ)

雪対策の「シナリオ」への支持

- ・4つの未来像のうち、どの方向性を重視すべきかという、市民の価値判断の傾向。
- ・各シナリオが内包するトレードオフに対する、市民の受け入れ度合い。

② 雪をどう受け入れ、支えあうのがよいか



Q③: 除排雪の具体的な方向性の受け入れ度合い(各7段階)

- └ 幹線・歩道は先にきれいにする／生活道路は状況により遅れる
- └ 地域の細やかな除雪は市の支援を受け地域で対応

Q④: 地域支援メニューの優先度(各7段階)

- └ パートナリシップ排雪／公園の雪置き場の開放／除雪機貸出
- └ 融雪設備補助／除雪ボランティアへの支援

Q⑤: まず充実させるならどれか(5つから1つ)

不便さの受け入れ度合いと「地域支援メニュー」

- ・除雪の遅れなど、どの程度の不便さを、どのような条件なら受け入れやすいか、その許容範囲。
- ・地域協働を促進するために、市が優先して実施すべき「地域支援メニュー」。

③ 大雪の日の暮らし方のルール



Q⑥: 大雪時の対応への賛成度(各7段階)

- └ 時差出勤・時差通学／在宅勤務・オンライン授業／会社や学校が基準で休む／冬の移動支援(バス等)

Q⑦: 取組を実施する条件はどれか(4つから1つ)

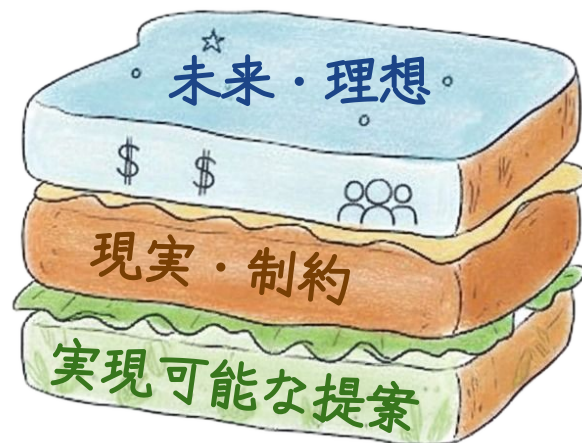
- └ 「大雪に関する気象情報」の発表／主要な幹線道路で深刻な交通障害の発生／公共交通機関の計画運休や大規模な遅延の発生／市が市民に外出自粛を要請

行動変容を促すための「スタイル」

- ・大雪の際に「無理して動かない」という社会のスタイルとその適用条件。

参加者の自由な発想を尊重しつつ、最終的に現実的な方策を考える

”サンドイッチ構造”の考え方



【1枚目のパン(上)】

未来や理想を語る

制約を一旦脇に置いて、ポジティブな側面から議論を始め、参加者にまず雪に対するポジティブなイメージを膨らませ、モチベーションを高める。

【中身の具】

現実と向き合い対話を深める

理想を語るだけでは議論が発散する可能性があるため、全員が同じ「現実」と向き合い、その後の対話へとつなげる。

【2枚目のパン(下)】

制約の中で提案を考える

「色々な制約がある中でどうすべきか」という問いかけにより、具体的な選択肢について議論を深め社会全体の視点から現実的な方策を考える。

現実的な方策を考える

夢を語るだけではなく、制約を理解することで、現実的な提案が生まれやすくする。

参加者の納得感を高める

「できない」という制約を提示するのではなく、一度未来を語る場を設けた上で、現実的に考えてみる、という構造により、結論をより自分事として受け止めていただく。

多角的な視点をはぐくむ

個人の経験(主観)だけではなく、多様な参加者との対話することで、多角的な視点を取り入れやすくする。

多角的な視点から課題を捉え、多くの市民が納得できる政策の方向性を見出していく

”ハイブリッド対話”の考え方

【同世代型議論】「仲間意識」による心理的安全性の確保と深い意見の引き出し



【ミックス型議論】世代ごとの意見を共有して相互理解を深め全体最適な視点を醸成



現実的な課題解決に向けた合意形成

同世代型で生活実態やニーズを掘り下げ、ミックス型で異なる世代の価値観をすり合わせることで多角的な視点から課題を捉える。

世代ごとに異なる課題や価値観を踏まえつつ、行政の制約という現実的な条件を考慮した議論を可能にする。

この段階的なアプローチにより、現実的で多くの市民が納得できる政策の方向性を見出していく。

複雑な課題に対し、多様な市民と行政が協働して納得感のある解決策を見出すための「型」の構築を目指す

フレームの5ステップ

本ワークショップでの実践

目指す議論の手法



1. 共通土台の形成

前提となる客観的な情報を共有

1. 情報提供

制約などを共有



2. 価値の共有

何を大切にしたいか言葉にする

2. 同世代議論

各世代の価値観をまとめる



3. 選択肢について考える

メリットとデメリットを比較

3. シナリオの比較

トレードオフも含めて比較検討



4. 方向性と条件の具体化

方向性を選択し、条件も言語化

4. 世代ミックス議論

多様な視点から合意点を探る



5. 成果の確認と引き渡し

成果を次の意思決定プロセスへ

5. 審議会・市民会議へ

次の議論に活用

多様な意見を効果的に引き出し、複雑な問題に対して、市民と行政が協働して問題を解決

今後も市政に参加したいと思える満足度の高い対話の機会の創出

